

舒明天皇歌論

田中文雅

賀茂真淵は、その著「万葉集大考」^(注1)の中で

○いとしも上つ代々の歌

人の真ごころのかぎりにして、そのさま和くもかたくも強く
悲しも、四の時なす立かへりつゝ前しりへ定めいひがたし

○やゝ中つ代——高市崗本の宮の御時より——

み冬つき春さり来て、雪永のとけゆくがごとし

○藤原の宮となりて、

大海の原にけしきある鳥どものうかべらむさまして、おもしろ
きいきほひぞ出きたる

○奈良の宮の初め

此いきほひ有をまねびうつせしまゝに、おのがものともなく
うらせばくなりぬ

○其宮のなかつ比

ゆかしき隈もなき海山を、風はやき日に見んがごと、あらび
たるすがたと成ぬ

と、万葉集の歌風の変遷を、五つの時期に分け、示唆的な評語で

舒明天皇歌論

論じている。

真淵の分析を待つまでもなく万葉集では「雑歌」、「相聞」、「挽歌」、「譬喩歌」、「問答歌」の内容上の分類の他に、

卷一——「泊瀬朝倉宮御宇天皇代」「高市岡本宮御宇天皇代」

「明日香川原宮御宇天皇代」「後岡本宮御宇天皇代」「近江大津宮御宇天皇代」

「明日香清御原宮天皇代」「藤原宮御宇天皇代」

「寧楽宮」(以上雑歌)

卷二——「難波高津宮御宇天皇代」「近江大津宮御宇天皇代」

「明日香清御原宮御宇天皇代」「藤原宮御宇天皇代」(以上相聞)、

「後岡本宮御宇天皇代」「近江大津宮御宇天皇代」「明日香清御原宮御宇天皇代」

「藤原宮御宇天皇代」

「寧楽宮」(以上挽歌)と

いった天皇による時代別の分類があり、万葉集編者の万葉歌に対する素朴な歴史意識を見ることができるといえる。しかしそれは、作者を、

その作者が生きた、又は生きたと思われる時代に配列したものであり、作品群の持つ内的な詩的構造や、文学的傾向にまで考え及んだものではなかった。真淵は、歌風の変遷を、直観的に把握す

ることから出発し、その「うつろひ」を時代の推移との関連性の中に求めようとしたのである。真淵独自の直観的暗示的な叙述ではあったが、作品の持つ文学としての特質を、自己の作品享受の主体に即して把握し、その変遷の位相を、その作品を生み出した社会の変遷との関連において位置付けようとしたこの真淵の態度は、きわめて正しい文学研究の方向を示したものである。

真淵による「上つ代（上古）」「中つ代（舒明以降）」「藤原の宮」「奈良の宮の初め」「其宮のなかつ比」の五期の区分は、それ以降、万葉歌風の変遷を考える上で、一つの指標となり、より厳密な検討が加えられることとなる。

真淵のいう「いとしも上つ代々」は、記紀歌謡の後を受け継ぐ伝誦歌の性格が強いとして、これに含めない説が多いが、「やゝ中つ代」は、舒明、又は齊明天皇より壬申の乱までをもってこれにあて、万葉第一期とする説が有力である。そして、この二つの時期を文学史的に「初期万葉」と呼称する田辺幸雄氏の説が一般化している。

では田辺幸雄氏が命名したという「初期万葉」の特質とは何であらうか。

徳光久也氏は、「ジャンル」「民謡性」「政治性」の三つの視点から簡潔に論じているが、この内「民謡性」「政治性」については、初期万葉を特徴付けるものとして、多くの研究者も上げるところである。

この時期の特殊さが、作品と歴史とのからみ合いの密度に見出

される……初期万葉の作者のほとんど大部分は、皇室関係の、それも、その中枢部の人々から成っている。

田辺 幸雄^(注4)

初期万葉のばあい、作品と時代＝歴史とのむすびつぎの特殊な性質がまず問題となる。事件そのものを生き、歴史を動かそうとした人間の直接の体験と感動を詠じた作品

石母田 正^(注5)

歌が伝説から分離し抒情詩としての性格を確立して来た舒明、皇極朝以後の四十年をその範囲としてよい。

古代国家生誕の苦闘の歴史の激動を生きた主役たちによって生み出されたもの

大久保 正^(注6)

舒明天皇の御代から、初期万葉の作品は稍々増加する。同時に歌謡的な作品が、個性的性格を示すようになる事も事実である。

久米 常民^(注7)

……万葉ぶりの最初は舒明天皇の歌であるとするのが至当であらう……

抒情詩が歌謡から、自我が共同体から離れたたてで、両方の要素がそこでは微妙に交わりあっている。

西郷 信綱^(注8)

以上の諸氏の見解は、

一、抒情詩の成立、

二、作者と、その生きた時代との特別な結び付き

の二点に集約される。しかしこの二点は緊密な結び付きを持っている。ここで指摘されている抒情詩とは、西郷氏も述べている自我の意識を持った、歌謡より抜け出した個人の体験による創作詩を意味していると考えられるものである。この場合の個人とは、古代国家の形成期を、政治史の中心となつて生きた、とされる天皇家を中心とした人々を指していることは自明である。

しかし初期万葉に、右に述べた抒情詩の成立を見る説に疑問が提出されていることなどより、初期万葉の抒情詩は、後のそれとはかなり異質のものを内包している事。又、徳光氏によつて、「政治性」と明解に指摘された、万葉作者と時代との特殊な結び付きの問題についても、「一般的に時代の構造や風潮を単純に対応させる」方法では、より正確な作品理解は期し難い。特に歴史と神話が混然一体となつている万葉初期の政治性の検討には種々の困難がある。又更に、文学性、政治性、宗教性などが未分化であつたと考えられる当時の古代人の意識からみて、その困難さは、一層大きなものとなる。

以下、「万葉ぶり」の最初とされる舒明天皇の望国歌について、諸氏が特徴としている政治性、歴史性、抒情の問題などを中心に、作品の分析を通じて、その実態を明らかにしていきたい。

高市岡本宮御宇天皇代 息長足日広額天皇

天皇登_二香具山_一望_レ国之時御製歌

山常庭 村山有等 取乎呂布 天乃香具山騰立 国見乎為者

舒明天皇歌論

国原波 煙立籠 海原波 加万目立多都 怜何国曾 蜻嶋 八
間跡能国者

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち
国見をすれば 国原は煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うま
し国ぞ 蜻蛉島 大和の国は

(卷一、二)

集中、右の歌以外に舒明天皇歌と考えられる可能性のあるものとして、次の五首がある。

(A) 岡本天皇御製一首 并短調

485 神代より 生れ継ぎ来れば 人多に 国には満ちて あぢ群

の去来は行けど わが恋ふる 君にしあらねば 昼は 日の
暮るるまで 夜は 夜の明くる極み 思ひつつ 眠も寝がて
にと 明しつらくも 長きこの夜を

反謂

486 山の端にあぢ群騒ぎ行くなれどわれはさぶしる君にしあらね

487 淡海路の鳥籠の山なる不知哉川日のところろは恋ひつつもあ
らむ

右、今案、高市岡本宮、後岡本宮、二代二帝、各有異焉。
但稱_二岡本天皇_一、未_レ審_二其指_一。

(B) 岡本天皇御製詠一首

(卷四、相聞)

1511 夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝にけらしも

(卷八、秋雑歌)

(C) 泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇御製詠一首

1664 夕されば小倉の山に臥す鹿は今夜は鳴かず寝ねにけらしも

右、或本云、岡本天皇御製。不審正指。因以果載。

(卷九、雜歌)

題詞、左注によって岡本宮御宇天皇に比定される天皇は、「高市岡本宮御宇天皇」の舒明天皇と、「後岡本宮御宇天皇」の齊明天皇の二人である。

(A)の歌群の作者は、舒明、齊明の二人が考えられるが、歌中の「君」の用語より、齊明とするのが有力である。しかし、卷十三、三二四八番の額歌から、「伝承の流れの中にあつた歌であり、齊明天皇御製を疑問視する見解もある。

(B)の歌も作者を、舒明、齊明の二人の天皇に比定されるが、同じ類歌を(C)の題詞では、雄略天皇の歌とし、更に(C)の左注では「岡本天皇御製」という或本の異伝を記している。即ち(B)、(C)の「夕されば」の作者には、舒明、齊明、雄略の三人が当時考えられていたことを示している。又、この歌は、その背後に鹿の伝承を持ったものであり、右の作者の不明確な点からしても、天皇個人の創作抒情歌とは認め難い。

以上題詞、左注より問題なく舒明天皇御製歌と考えられるのは、卷一、二番の望国歌だけであることが結論される。そうして、こ

ことは、それ以前の天皇たちと同じく「伝誦の作家」としての性格を舒明天皇が併せ持っていたことを示すものである。

四四

舒明天皇望国歌については、多くの見解が示されているが、その中で、特にこの歌の歴史性、政治性と文学との関連について述べたものをあげてみたい。

吉永登氏は、本歌の背景となる推古帝崩御後の皇位継承をめぐる政治史を素描し

「国見とか国ぼめとかはもととその年の穀の豊稔を祈るためにあつたらしいが、この歌にはも早そういう要素は表面には見られない。歌は少くとも当時の安定した国情を反映していて、無力の天皇のわずかに自らを慰めている姿が見えるようであり、しくも思われる。この歌については、「国原は煙立ち立つ海原は鷗立ち立つ」に叙景歌の芽生えを認めようとするのが通説のようである……」

(卷一、二番歌評)

岡本宮にあつて、東方高市郡の郡境に近い、磯城郡にあつた小倉山に鳴く鹿を思ふての作である。政治からの逃避がたまたま動物への愛情となつていてと考えれば、そこに何か同情をひくものがあるう

(卷八、一五一一歌評)

と述べている。

土橋寛氏は、

われわれは国見歌から叙景歌が生れてくる一つの過程を、この歌に見ることができるよう思う。……………この歌が記紀の国見歌に比して新しく、叙景歌的であるということ、記紀の天皇国見歌が抽象的な国讃めであるのに対して、この歌が蘇生した自然の姿を具象的に捉えていることによるのであって、舒明天皇の国見歌でありながら政治意識に妨げられることなく生動感に満ちた秀歌になっている。^(注15)

と評している。両氏は一致してこの歌に叙景歌、叙景的要素を認めようとしており、又政治性と作品との関連においてもかなり共通の要素を持っているように思う。吉永氏は、政治から離れたところでの人間天皇の姿を、政治から逃避する事によって向けられた動物への愛をうたったものとしており、土橋氏も、「天皇の国見歌でありながら政治意識に妨げられる事なく」展開された秀歌として、この歌を評価している。しかしながら、一体この歌は、政治から逃避している無力な天皇の自らを慰める歌、として理解し評価されるべきであろうか。この歌は、政治意識を帯びなかつた為に、より評価される作品となつたのであろうか。私は、こうした点に疑問を感じないわけには行かない。

田辺幸雄氏は、「初期万葉の作者たち『初期万葉の世界』」の中で、この時期を飾る八人の代表的な作者を次のようにあげて論じている。

雄略天皇、舒明天皇、齊明天皇、有間皇子、天智天皇、倭太后、大海人皇子、額田王

舒明天皇歌論

これらの作者は、いづれもまさに「古代国家生誕の苦闘の歴史の激動を生きた主役たち」^(注16)であり「事件そのものを生き、歴史に参加した人間、歴史を動かそうとした人間」^(注17)であった。こうした他の作者達に比し、今ここで取り上げた舒明天皇については、何ら特記すべき記事を『日本書紀』は記していない。この原因については、諸家が説かれる如く、舒明天皇は推古崩御後、蘇我氏によって擁立され、常にその監視下におかれ、傀儡の天皇としての意味しか持たず、在位期間も短かつた事などがあげられよう。吉永氏が、自ら力を持たない、政治から疎外され、逃避している人間舒明を設定し、その自らをなぐさめている声と考えたのは理由のないことではない。しかし、こうした立論には、いくつかの前提が必要となろう。即ちこの歌が完全に儀礼的要素を振り払い、純然たる個人詠の抒情歌、叙景歌となっていることである。以下検討する如く、本歌と儀礼との関係は、未だ根強いものがあり、伝承歌謡としての性格もかなり強いものがある。又、作品の高い評価を妨げるものとして考えられた政治意識も、この作品成立の条件にかかわるものであり、もっと異った視点からの考察が必要であると考える。

本歌が国見歌、国見儀礼の延長上にあることは、「天皇登_二香具山_一望_二国之時_一」と記された題詞や、「天乃香具山 騰立 国見乎為者」といった歌中の詩章で容易に伺うことができる。古く『代匠記』(初版本)は、

天子は巡狩といふ事をさへして国々の様を見給ふことなれば、

国見は国の盛衰、民の衰榮をうかゝひしろしめすに尤要なり

と記し又、岸本由豆流は『攷証』で

望国は、くにとよむべし、古しへの天皇高き所にのぼりまして

国中を見給ひし事まゝあり、それ百姓の貧富、また国中のよしあしを、専ら見たまふにて、たゞけしきを見給ふにあらず……

と、天子の行ふ国見行事の政治的内容を指摘している。こうした国見歌の持つ政治性、歴史性を一層明確に論じたのは、吉田義孝氏である。氏は、記紀万葉の国見歌の詞書きの中の「望」の用字の分析から、そこには、歌謡の記録に際して、或種の特殊な意識、即ち『書経』の注にある「九州名山大川五嶽四瀆之属皆一時」に望祭するのが「望」であったこと。この古い祭祀に關係を持っていた歌謡は、古代国家統一と共に、宗教的統一意識として用いられたものと説明している。^(注18) 国見歌が古く、祭祀に關係を持っていたことの指摘と共に、ここで重要なことは、国見歌謡が展開していく過程に、国家統一の重要な要素である宗教的統一意識として機能していたということである。ここには、明らかに単純な政治性、政治意識では割り切れない、政治性と宗教性の未分化の状態が機能している国見歌謡の姿を見るのである。

国見儀礼の起源について、折口信夫は、元来海の彼方から来訪して来たマレビトが、後から天降るようになり、山の上に立って土地の精靈の代表たる山の神や土民に命名を宣下すると、その効果が土地、人民に及んでその年は祝福される。このマレビトの儀

礼の名残が「岡見」の習俗で、国見の原形はここにあると説明しており、更に三谷栄一氏は、この折口説を肯定し、訪れるマレビト神とは、祖靈(田の神、戌亥の神)であり、それを迎える農耕儀礼である。^(注20) 「国見」は元来民間の儀礼で、春の初め岡や山に登って火田を卜定する農耕儀礼であるとする土橋寛氏の説などがある。吉田氏も述べている如く、民間行事としての国見は、族長の行事へ、更に天皇の行事へと展開して行く。こうした過程にあつて、程度の差こそあれ、宗教性と未分化の政治性なるものは、どの段階にあつても、有効性を持ち得ている。春先、高い所から、これから一年の幸せを予祝する場合、広大な自然に呼びかけ、言葉の呪力によって、その対象の自然の生命力を刺激させて、豊かな生活を保証させ、人間の命令に従わせる為には、それだけ巨大な抒情を備え発し得る主体が要望される。古代の天皇が、巨大な権力を持つ事と同時に、強力な呪力を持つ人、強大な祭祀を司どる力を有していなければいけない理由がここにある。一族のその年の保証が一国人民の生活を保証するようになるには、強力な政治力は勿論、一国の代表としての資格で、自然に命令し、服従させ、豊かな生活を約束させる事が必須の条件なのである。その為には、無限定な自然の本質を、しっかりと把握、魔術的な言葉と、そうした言葉を発し得る巨大な抒情主体が必要だったのである。こうした側面から考察すると、国見儀礼そのものが、元来、政治性、宗教性、文学性等の未分化な要素を必須の条件として成立していたといえるのではないかと思う。

記紀における国見歌謡をあげてみると

1 淡道島に坐して、遙に望けて歌曰ひたまひしく(仁徳紀)

おしするや 難波の崎よ 出で立ちて 我が国見れば 淡島

自凝島 檳榔の島も見ゆ 放つ島見ゆ

2 一時、天皇近淡海国に越え幸でましし時、菟野野の上に御立

ちしたまひて、葛野を望けて歌曰ひたまひしく(応神紀)

六年の春二月に、天皇、近江国に幸して菟野野の上に至りて、

歌して曰はく(応神紀)

千葉の 葛野を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見

3 其れより幸行でまして、能煩野に到りましし時、国を思ひて

歌曰ひたまひしく(景行記)

是の日に十七年の春三月の戊戌の朔巳酉、野中の大石に陟りまし

て、京都を憶びたまひて、歌して曰はく(景行記)

倭は 国のまほらま 豊づく 青垣 山籠れる 倭し麗し

4 六年の春二月の壬子の朔乙卯に、天皇、泊瀬の小野に遊び

たまふ。山野の体勢を鑑して憫然みて感を興して歌して曰はく

(雄略紀)

隱国の 泊瀬の山は、出で立ちの よろしき山 走り出の

よろしき山の 隱国の 泊瀬の山は あやにうら麗し あや

にうら麗し

従来、こうした記紀の国見歌謡については、地の文との結び付きによる物語歌謡、独立歌謡の別、更に叙述の形式や、対象とされ

る景物の意味について、又更には、国見歌の分類から「予祝行事としての国見で歌われたと思われる国讃め歌」などとして説明されて来た。

これに対して1.の仁徳天皇歌を、独立歌謡として、「国見」(記伝)の歌であり、特におそらく、津の国の難波の御津における八十島神祭の古式の場を中心として歌われた国見歌謡である、とする本田義憲氏の見解(「原八十島神祭歌謡をめぐる覚書」『万葉』六十九号)が示された。

八十島祭が、文献上最初に見えるのは、

壬八午。遣宮主正六位下占部雄貞。神琴師正六位上菅生朝臣

末継。典侍正五位下藤原朝臣泉子。御巫無位榎本連淨子等。向

摂津祭八十島(嘉祥三年九月 傍点筆者)

と記された文徳天皇実録の記事である。以降四百年近くにわたって二十二回も文献にその記事がみえる。これは天皇即位の翌年に行われるもので、女官を「八十嶋祭使」として難波津に派遣して住吉神社を祭ったものである。この祭儀の祭神や、目的についても諸説(①禊祓の神事、②国土生成の発展を祈願する祭儀)があるが、岡田精司氏は、鎮魂祭、大嘗祭などの考察から、この祭儀の中心をなす「神祇官彈御琴、女官披御衣宮振之」の神事を重視し、「治世の初めに当って新帝の身体に(大八洲之靈)を付着せしめ、全国土の支配者としての資格を呪術的に保証しようとしたもの」と推定し、更に、

この祭儀は、「記紀」に伝えられたイザナギ、イザナミの国生

みの物語と、密接な関係があると思われる。この神話は天皇の
 国土支配の正統性をうらづける政治的役割と同時に、国土生成
 の物語を皇祖神の神統譜中に編み込むことが、皇室の現実の国
 土領有を呪術的に保証するという宗教的意味をもったのである
 と結論している。本田氏は、右の岡田氏の説をふまえ、先の「お
 してや 難波の崎よ……」の歌謡の具体的な場を八十島神祭に求
 め、その「おしてや」の詞章に

難波に日の御子を迎える太陽神饗礼として靈威満ちて照るとい
 う意味をのこすように思われる……
 (同氏前記書)

と注目すべき見解を示している。これまで国見饗礼の一般的傾向
 からしかこれらの国見歌謡が説かれなかったのに対して、具体的
 な即位饗礼が指摘され、その饗礼に付随した歌謡として位置付け
 られ、始めてこの仁徳国見歌謡が持つ歴史性があきらかにされた。
 そうして重要な事は土橋氏も説く如く、この仁徳天皇歌と、舒明
 天皇国見歌とは、同じ系統に属するもの、即ち「予祝行事として
 の国見で歌われた国讚め歌」^(注24)と考えられる事である。

以上の説の中で、特に私の興味を引くのは、八十嶋祭饗が、
 「記紀」のイザナギ、イザナミの国生み神話と深い関係があるとい
 う事である。M・エリアードは、その著『永遠回帰の神話』及
 び『イメージとシンボル』の中で

……ある事物もしくは行為が真実なものとなるのは、ただその
 原型を模倣するか、それをくり返す限りにおいて、しかあるとい
 うことだ。つまり実在とは、ただ反復もしくは分与を通して

のみ獲得される。模範的モデルを欠くものは何であれ「無意味」
 なこと、即ちリアリティを欠くのである。

……一つの行為(あるいは事物)がある典型的しぐさの反復を
 通じてある種の実在性を獲得する限りにおいて、そしてまたこ
 れを通じてしか実在性を獲得できないという点で、そこには俗
 的な時間、継続性、「歴史」の暗黙裡の撥無がある。そしてこ
 の模倣的しぐさを再現する者は、自らその啓示の始めてあらわ
 れた神話時代へ送り込まれたことを自覚するのである。

「神話と歴史」(『永遠回帰の神話』所収)

「俗なる時間を超越」し神話的な「大いなる時間」を再発見す
 ることは、究極の実在を露にすることゝ等しい価値をもつものだ。
 敵密に形而上学的な実在、それは神話とシンボルを通してしか近
 づくことができない。

「時間に関するインドの神話」(『イメージとシンボル』所収)
 これはエリアードが「原始的」存在論の観念について述べた部分
 である。この見解によって我々は、1の仁徳天皇の国見歌「おし
 てるや 難波の崎よ……」が、饗礼歌として何を志向しているの
 かを理解することができる。天皇の即位饗礼である大嘗祭に付随
 した八十嶋祭が、イザナギ、イザナミの記紀の国生み話と密接な
 関係がある事は、注目すべき事である。その八十嶋神祭りの歌謡
 の中に、イサナギ、イザナミの神話の中に出てくる淡島、渺能基
 呂島などの島々が出てくるのも、偶然の事ではない。国見饗礼で

司祭者が志向しているのは、この宇宙の始まりの「偉大な空間」
「偉大な時間」（ジョルジュ・ギュスドルフ『神話と形而上学 哲学序説』）を生きることであり、それによって日常の生活にはなかつたより根源的な実存の確認をすることとなる。

舒明天皇の国見歌が、記紀万葉に見る他の国見歌と異っている点
は、

首句にやまとはとおこし給ひて、尾句に、やまとの国はと、
むすび給へる。首尾相ととのひ、中には果（景？）物あらはれ、
対句そなはりて、かけたることなくすぐれたり（りはる？）長
歌也。まことに長歌の本ともすべき御製なり（注25）

の評語に示される詩形の整備と「やまと」への全力的な讚美である。この「やまと」については、直木孝次郎氏の詳細な研究がある（注26）。氏によると、やまとはは広義、狭義の意味があり、「天皇または朝廷の支配する古代日本国家」「日本六十余国の一つの大和国」、更に「令制下の大和国の一部——城下郡」、古文獻には「於保也万止」「於保夜末止」と記される大和郷の三通りの意味を各々持っており、特に磯城郡、十市郡を主とする地域をいいあらわした時期が、六世紀から七世紀の天武朝まで存在したとされている（注27）。香具山よりの国見によって見渡される地を、歴史的に、地理的に考察するなら右の直木氏のやまとの範囲が妥当性を持つてくる。しかしこうした考察と同時に、国見歌で呼びかけられる対象としてのやまとの性格（蜻蛉八間跡能国者」と「蜻蛉」を冠せられた「や

まと）は、地理的な意味から、観念的な存在へと転化する。

そらみつ やまとの国は 神からか ありがほしき 国からか
住みがほしき ありがほしき国は あきづ島やまと

「琴歌譜 雑12」には、右の歌を載せており、「あきづ島やまと」
「そらみつ やまとの国は」の「やまと」に冠された各々の冠辞
が、国見国讚めの詞章として伝承され重要な意味を持つていた事
を伺わしめる。

雄略記には、天皇が、阿岐豆野に狩をして呉床に坐っていた所
に、虻が御腕にくい付き、そこへ 蜻蛉が来てその虻を食べて飛
んでいった。そこで次の歌を作ったとして、

み吉野の、衰傘漏が獄 猪鹿伏すと 誰ぞ大前に奉す やすみ
しし 我が大君の 猪鹿待つと 呉床に坐し 白栲の 衣手著
具ふ 手舂に 虻かきつき その虻を 蜻蛉早咋ひ かくの如
名に負はむと そらみつ 倭の国を 蜻蛉島とふ

という蜻蛉島大和の地名起源譚をしるしている。三谷栄一氏は、
蜻蛉をめぐる呼称を、

トンボ朔日（京都府中部三重村、大宮町）

盆トンボ（岡山地方で赤トンボ）

ブンエーダー（盆蜻蛉）に先祖霊のつてやってくる（喜界島）
精霊ヤンマ（関東）

とあげて蜻蛉は秋飛ぶものとして異常に注意されたからであらう
し、時期からいっても盆の精霊迎への頃からである。と説明し、
古代人は蜻蛉について二種の神秘感を持った、その一つは「精霊

とんぼ」「精霊やんま」で呼ばれる祖霊の使いとしての意味と、二つはその精霊も田植の頃から禊る頃までの田を祝福してくるものとしての意味である。としてゐる。(注26)

神武紀の終り近く有名な蜻蛉の「聳帖」を以て国形をあらわした一文がある。

三十有一年の夏の四月の乙酉の朔に、皇輿巡り幸す。因りて腋上の兼岡丘に登りまして、国の状を廻らして望みて曰はく「妍哉乎、国を獲つること内木綿の真注ぎ国と雖も、蜻蛉の聳帖の如くにあるかな。」とのたまふ。是に由りて始めて秋津洲の号有り。

昔、伊弉諾尊、此の国を目けて曰はく、「日本は浦安の国、細戈の千足の国、磯輪上秀真国」とのたまひき。

復大己貴大神、目けて曰はく、「玉臈の内つ国」とのたまひき。饒速日命、天磐般に乗りて、大虚を翔行きて、是の郷を睨りて降りたまふに及至りて、故、因りて目けて、「虚空見つ日本の国」と曰ふ。

(注29)

「昆虫の生殖と、農の生産の祝福」する説話を含め、四つの異った地名起源を記している。神武天皇に続き、伊弉諾尊、大己貴大神、饒速日命へとたまたまかけるように続くこの神話の背景には、「昔、この宇宙の始りの時、ある英雄が、この日本の地を望見して、讚め詞を発した」といった祖型があり、その祖型を代表するものとして右の四つの人物が列挙されているとの認識があるのである。神武天皇の神話が価値を持ち、有効性を持ち得たのは伊

弉諾尊、大己貴大神、饒日命と同じ伝統的行為を繰り返しているところにある。

蜻嶋 山跡の国を 天雲に 磐船浮べ ともにへに まかいし
じぬき いこぎつつ 国看しせして あまりまし はらひたひ
らげ 千代かさね いやつきくんに……

(万葉卷十九、四二五四)

大伴家持のこの長歌は、右にあげた饒速日命の伝承と同じ、祖神が天降る時、天磐船にのって「大虚」を「翔行」しながら国見をしたという祖型を伝えており、又「蜻嶋山跡」の詩章と国見行事との根強い結びつきをみせている。多分折口信夫がいう如く「大倭国讚めには、本格式にはあきつ或は、あきつしまなる生命標とも言ふべき語を、詞章の中に含めねばならなかつた」(注30)からなのであらう。

舒明天皇国見歌で、その対象である大和の本質を最も良く表わしたものと選ばれたものは、蜻蛉の話を中心に展開し、祖神たちによって命名されたという伝統詞章「あきづしま大和」であった。この「生命標」で呼びかけられ、祝福された自然は、やがて自己の躍動の相として、歌により込まれた「国原は煙立ち立つ、海原は鷗立ち立つ」活状を、呈するようになる信じられていたのである。

「天降りつく 天の香具山 霞立つ 春に至れば……」(卷三、275)、
「天降りつく 神の香具山 打靡く 春さり来れば……」
(卷三、260)と万葉集で歌われた「天の香具山」についても、「蜻

蛤嶋倭」と似た事情がある。

『伊予国風土記逸文』『阿波国風土記逸文』には各々、天より降り下った断片が、大和の天の香具山であるとす所伝を記している。^(注31)

香具山は、三山の中でも、古代宮廷祭儀の履行はれた処である。斎場は、同時に天上の地と見做して行うのが信仰的規約だった。為其延長から平常でも其地を尊仰して神聖なものとし、又天上界の地と考へる習俗が長く遣つたのであろう。

とする折口の説明が参考になろう。『記』の天の岩戸の条で、岩屋戸の天照大神を迎える为天兒屋命を呼び「天の香山の真男鹿の肩」を内抜きにし、「天の香山の天の波波迦」で占いさせ、「天の香山の五百津の真賢木」を根掘じにして、数々のものを取付け布刀玉命が持ち、天の宇受売の命は、「天の香山の天の日影」を香草に結び、天の真折を鬘とし、「天の香山の小竹葉」を香草に結び、覆槽をふみとどろかし、神懸りして踊つたとある。古代演劇を彷彿とさせるこの場面で、用いられる物に一つ一つ周到に「天の香具山の」と冠されているのは、天上にあつた「天の香具山」の持つ聖性を、分ち持つ事ができると信じているからである。現実世界の採物は、儀礼の場で「天の香具山の」と呼ばれることによって、天上の儀礼に用いられたと同じ聖性を帯び、權威をもつ存在に転化する。

『神武記』『崇神紀』には、各々「天の香具山の墳」の伝承を残している。八十梟師に行く手を遮られ進む事が出来ない神武天皇

は、夢の教えと弟猾の勧めで「天の香具山の墳」を手に入れ、天神地神を祭つた結果大和を平定したとある。又武埴安彦が謀反する時、「倭の香具山の土」をとって、領布の頭につつんで祈り「是、倭国の物実」といったとある。大和をその手中に治める為には、必ず「倭国の物実」として「香具山の墳土」を必要とした。これは、「国魂の象徴」としての意味を香具山の墳土に認めていたからに他ならない。

岸俊男氏は、天香具山が国見の場所として選ばれた背景には、大和を南北に縦貫する古道「中道」の線上に正しく位置し、南に対して「明日香」の要点であり、北に向つては、大和の「ヤマト」を望見しうる要衝であつたとし

……大和の要衝であり、象徴である香具山の墳土を手に入れることがその呪力によって、「ヤマト」を支配することにつながる。さらにそれが香具山における国見に結びつくと考えるのである。^(注34)

と結論付けている。

詩形や叙述の内容から、抒情詩の成立、叙景歌への脱皮すら伺えたとしたこの舒明天皇歌には、国見儀礼が志向する神話的回帰の意識が強く全体を呪縛しているといひ得るのであろう。手法としての新しさがそこにあるとするならば、それは、神話の世界を喚起するこの国見儀礼の目的に有効な手段として奉仕するものであろう。こうした意味で、「国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ」の詩章に実景描写の具象表現としての評価を与えてはならな

(注35)ここに歌われた対象が、いづれも国見歌にうたいこまれる対象(景物)としての性格を持つものであり、具体的には、「地靈や水靈(注36)のしきりに活動する姿」として実感されていたのであろう。ここで幻想されているのは、大和の長としての資格で、大和の国魂に魔術的詞章で訴えかけ、その結果としてもたらされるであろう大和の国魂の躍動の相としての形象である。即ちこの対句表現によって象徴されるものは、国原に生活する人々の生活の豊かさであり、鷗の群れ飛ぶ下に、豊漁を約束する魚の群であったのであろう。(注37)

私は以上の論述を通して、政治より疎外された個人の天皇像ではなく、国見儀礼の志向する神話の世界への回帰に奉仕する司祭者としての天皇像をみてきたつもりである。

そこには、「舒明紀」では伺うことの出来なかつた国見儀礼の司祭者として自信にみち、発する言葉の効力に十分の信頼を置き、大きく大和に訴えかけ、その自然を言葉の力によって魔術的に変容させている天皇像があつた。「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば……うまし国ぞ あきづ島 大和の国は」の中に表明されている強い抒情主体には、卷一の巻頭歌の「……そらみつ 倭の国は 押し靡べて 吾こそ居れ 敷き靡べて 吾こそ座せ……」と高らかに歌い上げる雄略天皇と共通のものが存している。「古代国家の支配者である//やすみししわが大君の//誠に協勢のとれた、あまりにも、殆ど完成されたに近いイメージを立体的に感じた」とする高木市之助氏の

指適が妥当性を持つところである。しかし既に述べた如く、「古代国家の支配者」である天皇としての強力な主体は、大和を予祝する国見儀礼に於いて、より大きな呪的效果を期待する必須な資格として存在したのである。大和の要衝であり、齋場である「とりよろふ天の香具山」に「登り立ち 国見をする」天皇に、古代国家のデイスポット像が存するのは、その「偉大な資格」で大和の国魂に訴えかけ、命令して、より有効な呪的效果を期待するという、国見儀礼歌の意図になつたものであつた。現実社会での「政治意識」は、この国見歌に於いて「文学意識」「宗教意識」と混然一体となつて、現実とは異つた詩的造形を受けた世界の中で、「うまし国ぞあきづ島大和の国は」の抒情に集中されて行く。M・エリアーデが、神話の特徴として掲げた「俗的な時間」「継続性」「歴史」の暗黙裡の撥無は、本歌における現実社会での「政治意識」の撥無にもつながるものであろう。

もし我々がここで「古代天皇制はまぎれもなく詩と芸術と自由の敵であつた」といった論理で、初期万葉歌がよつて立つ前提を否定する限り、舒明天皇望国歌は、何ら積極的な意味を持ち得ないであらう。

最後に、本歌の舒明天皇像には、白鳳人の始祖としての意図が反映している、と万葉編者の意識にその政治性をみる説があり、異つた視点からの分析ながら正鵠を得ている事を付記したい。

注1 『校本賀茂真淵全集』思想篇 上所収

注2 『作者類別 万葉集』 沢瀧久孝
年代順 森本治吉 共著
「初期万葉の世界」

田辺幸雄 (岩波講座 日本文学史) 卷二、古代篇

『万葉集 一』 (岩波 古典文学大系解説)

『上代文学概説』 大久保正

『日本古代文学史』 (改稿版) 西郷信綱
(岩波全書)

注3 「初期万葉論」 (『白鳳文学論』 所収)

注4 前記論文

注5 「初期万葉とその背景」 (『万葉集大成』 5 所収)

注6 「万葉集の歌風の展開」 (『上代文学概説』)

注7 「初期万葉の世界」 (『万葉集の比較文学的研究』)

注8 万葉集 (『日本古代文学史』 第二章)

注9 注5と同じ石母田氏論文

注10 引用之歌、題詞、左注は、岩波日本古典文学大系本『万葉集』に
よる。

注11 「初期万葉における天皇歌の問題」

遠藤庄治 (『論究日本文学』 25、26、30号)

岩波古典大系本『万葉集』の頭注では、この作者を伝誦的作家と
して、舒明天皇を擬する説があることを紹介している。

注12 「トガ野」の鹿と「ヲグラ山」の鹿

小島憲之 (『万葉』 九号)

「雄略御製の伝誦」

中西 進 (『万葉集の比較文学的研究』 所収)

注13 「高市岡本宮御宇天皇代息長足日広額天皇」「天皇登香具山望国
之時、御製歌」のこの記述と二番歌「大和にはむら山あれど……」
の長歌を直接結び付け、舒明天皇御製とすることに問題がなくも
ない。しかし今は通説に従っておく。

舒明天皇歌論

注14 「初期万葉の歌人 三舒明天皇」 (『講座日本文学』 2 上代篇 II
所収)

注15 「国見歌とその展開」 (『古代歌謡と儀礼の研究』 第5章所収)

注16 大久保正氏前記書

注17 石母田氏前記論文

注18 「思国歌の展開」 (『文学』 昭和23年7月号、第16卷7号)

注19 「万葉集講義」 (『折口信夫全集』 9 卷所収)

注20 「日本文学発生試論」——国見と歌垣の起源をめぐって—— (『実
踐女子大学紀要第三集』)

注21 『万葉集』——作品とその批評——

注22 土橋寛氏、前記 (注15) 書

注23 「即位儀礼としての八十島祭」 (『古代王権の祭祀と天皇』 所収)

八十島祭の記述については、右の書を参考とした。

注24 土橋氏前記 (注15) 書

注25 荷田春満、『万葉集備案抄』 万葉集叢書第二輯

注26 「やまとの範囲について」——奈良盆地の一部として——

注27 「日本古文化論攷」 樺原考古学研究所編

注28 折口信夫も正確には磯城、十市、高市の中原平原だとしている。
『万葉集の総合的研究』

注29 「国見と文学成立の基盤」 (『日本文学の民俗学的研究』 第三章所
収)

注30 折口前記 (注27) 書。

注31 「文学様式の発生」 (『折口信夫全集』 7 卷所収)

注32 この他『播磨国風土記』には、三山歌の妻争いの記事をのせてい
る。

注33 折口前記 (注27) 書。

「国占め国見と食饌」 (『古代王権の祭祀と天皇』 所収)

注 34

「万葉歌の歴史的背景」(『文学』1971. 9. vol. 39. 氏)のこの論旨は、より詳細に、「大和の古道」(『日本古代文化論攷』)に於いて論じられている。

注 35

沢瀧久孝『万葉集注釈』に引かれている「鷗」をめぐる諸説は、実景描写の立場に立つものである。又、土橋寛氏も、この対句表現に新しさをみる一人である。(「舒明天皇の望国歌」『古代歌謡と儀礼の研究』所収)。近年土橋氏のこの説をうけ、この表現に新しさをみるとする「舒明天皇の国見の歌における自然描写」三塚貴氏(『文芸研究』第68集)の説が示されている。

注 36

土橋氏前記(注15)書。

注 37

「国見の歌二つ」山路平四郎(『国文学研究』29集)

注 38

「英雄への途——雄略天皇の場合——」高木市之助(『文学』1957. 8. vol. 25.)

注 39

「天武天皇をめぐる」西郷信綱(『文学』1953. 3. vol. 21.)

注 40

「編者の意図」

—万葉集巻一の場合—

伊藤博(『国語、国文』第二十七卷十号290号)

尚、同様の見解は「万葉作者系図中、宮廷に繋るものは皆近飛鳥族に包含せられる訳である。だから万葉における宮廷詩は近飛鳥の大歌だと言ふ事が出来る……。『近飛鳥御家集』と謂った意味の歌集が万葉集を組織する基礎になってゐるのである」とする折口信夫(『折口信夫全集』九卷「万葉集講義」)や、更に「万葉の伝説のなかには、言葉の上には出さないにしても、それ以前に、古代、中世、近世が考えられて、仁徳、雄略(倭五王)こそ古代であり、内乱の暗黒時代を経て舒明朝(大化前代)の近代にいたる発想が存在したかも知れない」との林屋辰三郎氏(『万葉集大成』21「大和」)にも伺うことができる。

—昭和四三年院修了・本学助手—